

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

ネイティブスピーカー：
大学生の認識と学習のモデル

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 窪田, 光男 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006320

ネイティブスピーカー：大学生の認識と学習のモデル

窪田光男

はじめに

本稿の目的は、現在の日本の大学生が、日常的に使っている英語の「ネイティブスピーカー」という用語について、どのような認識を持っているかを調査することである。そして、彼らの考える英語のネイティブスピーカーと、彼らの英語学習の目標となるモデルとの間にどのような類似点、相違点があるかを考察することである。後で触れるように、このネイティブスピーカーという用語の問題点については、言語学、言語教育の分野でこれまでも様々な議論がなされてきた。しかし、本稿の目的は改めてその定義上の問題点を蒸し返すことではなく、現在の大学生の間でネイティブスピーカーという用語がどのように定義され流通しているかという実態を知ることから、英語教育に関する問題点を探ることである。

英語教育、また英語学習についての議論で、模倣のモデルとしてネイティブスピーカーの英語の使用例がしばしば登場する。ネイティブスピーカーの言語使用は言語能力を測定する基準としても使われ、ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Language) の示す OPI (Oral Proficiency Interview) の評価基準でも、最高レベルはネイティブと同等の熟達度とされている (Buck 1989)。また第二言語習得の研究においても、ネイティブスピーカーのような言語知識の獲得が成功の条件とされている (Gass & Selinker 1994: 11)。この分野の研究は、英語の教師は学習者を限り無くネイティブスピーカーに近付けることだという前提で行われていることは、業界の様々な専門用語からも推測される。まず、しばしば研究の対象とされる、学習者の発する中間言語 (Interlanguage) と呼ばれるものは、学習者が最終的にネイティブスピーカーの言語運用能力を身につけることが前提であり、中間言語はその途上にある「不完全なもの」であると認識されている。また、学習者が英語を話す時に観察される母語の影響は干渉 (interference) と表現され好ましくない影響であると考えられる。そしてネイティブスピーカーに近付くための歩みが止まってしまった状態は化石化 (fossilization) と呼ばれ、その状態は永続すると考えられている。しかし、これらの研究において、この最終到達目

標であるネイティブスピーカーの実体は明確に定義されておらず (Kubota 1997)、共通理解の得られた自明のものであると考えられているかのようである。しかし、今日の多様な英語の使用者を考えた時に、いったいどのような人々をネイティブスピーカーと考えるのかということになると、複雑な問題が山積みでありその答えを出すのは容易ではない。多くの場合、英語学習者 (時には研究者、教育者も含めて) はこのネイティブスピーカーという用語が実はどのような人々をさすのかを、立ち止まって考えることなく、あたかも共通理解が得られているという錯覚のもとで気軽に使われているというのが現状である。

日本の英語教育や英語学習のコンテキストでも、ネイティブスピーカー (または略してネイティブ) という用語は頻繁に使われている。私の身の回りにおいても、日本人の英語教師と区別するのに「ネイティブの先生」というラベルで一括りにされる英語教師がいるし、学習の最終目標を「ネイティブスピーカーのように話せるようになること」とする学生も多い。また、英語でレポートを作成すると最終段階で「ネイティブチェック」なる御墨付きをもらって提出しようとする学生もいる。これら学生たちの日常的に使う「ネイティブスピーカー」という言葉を聞くたびに、私はこれまで言語学、言語教育の分野でのネイティブスピーカーに対する議論を思い返して、はたして彼らがどのような認識、理解でこの用語を使っているのであろうかと疑問に思ってきた。学生たちの言うネイティブの先生は日本人の英語教師と違うどのような質を兼ね備えた人のことを指して言っているのだろうか。ネイティブスピーカーのように話したいと望む学生は、どのような話し手を頭に描いているのだろうか。彼らが書いた作文を添削する資格のあるネイティブとは、どんな能力を持っていると考えているのだろうか。そして、彼らの考えている英語のネイティブスピーカーは言語学者や言語の教育者が考えるものとのような違いがあるのだろうか。そしてこれらの学習者のネイティブスピーカーへの認識を探ることから何か英語教育を考える上での問題点は見えないだろうかといった疑問である。今回の調査結果をもとに、このような点について考察していきたい。

言語学・言語教育におけるネイティブスピーカー

学問的にもネイティブスピーカーという用語については、そのあまりに気軽な使用を疑問視すべきであると主張する研究者は多い (例、Paikeday 1985, Kachru & Nelson 1996)。ネイティブスピーカーという用語に対して疑問を投げかけたバイオニア的存在であるインド出身の Paikeday (1985: 23) は、第一の暫定的定義として Longman や Collins の辞書の定義を引用し「ある言語を母語 (mother tongue) または第一習得言語 (first language) として身につけている人」としている。この定義は native という語の「出生地の」という意味を反映しており、一番広く理解されているものでもある (例、Liu 1999)。しかし、この定義も色々な問題を含

んでおり、批判的に疑問が投げかけられるべきだと主張する研究者もいる (Paikeday 1985, Rampton 1990, Kachru & Nelson 1996)。なぜなら、Paikeday 自身のように、インドでマラーヤラム語を母語として育ちながらも10歳より英語で教育を受け、21歳の時から35年にわたり祖国を離れたために、母語でも第一習得言語でもない英語を自分の一番得意で自由に使える言語であると考えような例もあるからだ。このような第二言語でありながらネイティブスピーカー並みの言語運用能力を持った人々をネイティブスピーカーと見なすかどうかについては議論が別れてしまう (Paikeday 1985: 24-26, Liu 1999)。また、第一習得言語でありながら、後に使用する機会がなくなり、非常に限られた運用能力しかなくなってしまう言語をネイティブ言語と呼べるかという問題もある。

そこで Paikeday (24) は第二の定義として「ネイティブスピーカーとはある言語の有能なスピーカー (competent speaker) であって、その言語を慣用に則って (idiomatically) 使う人」としている。同様に、Rampton (1990) は熟達したスピーカー (proficient speaker) という表現を使っている。しかし、この「有能なスピーカー」という表現も、どの程度の能力をもってネイティブスピーカーと見なすかについて、その境界線は曖昧なままである。理論言語学におけるネイティブスピーカーの能力は、あらゆる状況下でも決して間違いをおかさない文法的洞察力 (Chomsky 1965) とされている。そして、与えられた文が文法的か否かを判定する資格は、この能力を備えたネイティブスピーカーにのみ与えられるとされている。しかし、多数の言語学者の議論において、実際にこの世に存在する人々について、この資格者であるための能力があるか、すなわちネイティブスピーカーであるかどうかを見極める方法がはたしてあるのかどうかという度重なる Paikeday の問いに Chomsky も明確には答えず形而上学的説明に終始している。つまり、この世に存在する一人一人をある言語においてネイティブスピーカーかどうか判断する明確な術はないということである。そうすると、ネイティブスピーカーとは言語学者が理想化、概念化したものであり、実際には存在しないことになってしまう。

さらに、この文法性を判断する資格が与えられるネイティブスピーカーの能力がどのような条件下で身に付くと考えられているのかを検証しても様々な問題が浮上してくる。まず、言語の獲得の順序が問題となり、ネイティブスピーカーとしてふさわしい言語能力を獲得するには、生まれた時からその言語に触れていないといけないという考えになる。これは、第二言語習得の研究で議論されてきた、臨界期仮説と立場を同じくする。しかしもしそうであるなら、この第二の定義は、第一の定義の「第一習得言語 (first language) の使い手でなければならない」と同義になってしまう。だが、臨界期を過ぎてから学習を始めた人でも、適切な訓練によってネイティブスピーカーと同様の言語能力の獲得が可能であり、生まれた時からその言語に触れているかどうかは、あまり関係ないと主張する研究者もいる (例、Davis 1991, Phillipson 1992)。

獲得の順序に加えて、どのような環境で言語を獲得したかも、その言語のネイティブスピー

カーと考えるかどうかに影響を与える。特に、複数の言語を幼い頃から同時に使用しながら育て、バイリンガル、マルチリンガルになった人のネイティブ言語を判断するには多くの問題がある。Liu (1999: 95-96) の研究の参加者たちは、ネイティブと変わらない英語を話し、アメリカで英語による教育を受けていながらも、家庭での言語が英語でない場合は、自分自身を英語の非ネイティブスピーカーだと考える傾向があると報告している。Pennycook (1994: 168) は、このような二つ以上の言語を話す人々の意識は、60年代、70年代を中心に言語教育に影響を持った行動主義にもとづいた言語獲得理論が関係しているのではないかと分析している。つまり、英語の習得段階において、他の言語を併用すると英語の使用に「悪い癖」がついてしまう可能性があり、進歩の妨げになるという前提である。そして、これは健全な言語の発達はモノリンガル教育においてのみ達成され、ネイティブスピーカーはモノリンガルであるという考え方へと結びついているのである。

次に問題となるのは、今日のあまりに多様化した英語の変種のうち、どの種類の英語の使い手にネイティブスピーカーの資格が与えられるかということである。Widdowson (1996: 377) はシャンパーニュ地方で製造された発泡酒にのみシャンパンと名乗る資格があるのと同じように、英国の英語こそが真のパラエティーであると主張する。つまり、英語のネイティブスピーカーであるためには、英国の英語の使い手でなければならないということである。Kachru & Nelson (1996) は世界中の英語使用者を三つの円に分けて考えている。まず、英語が第一、または支配的な言語である国々（例、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド）を Inner Circle としている。そして、教育や政治などにおいて歴史的に長く英語の使用が制度化されてきた国々（例、インド、ナイジェリア、パキスタン、シンガポール、南アフリカ）を Outer Circle と呼んでいる。最後に、英語が日常使われていないが、広く学習されている国々（例、中国、インドネシア、イラン、日本、韓国、ネパール）を Expanding Circle としている。これら多様な英語の種類の中で、Kachru & Nelson (1996: 74) は、一般的に受け入れられている英語の種類として Inner Circle の中でもアメリカとイギリスの英語をあげることについては、誰も異論を唱えないだろうが、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドの英語については論議が起きるかも知れないと述べている。また、Outer Circle の英語については、Kachru (1986, 1992) 自身 non-native variety と呼んでいることから、これらの英語の話し手をネイティブスピーカーとは見なしていないのだと考えられる。

日本の英語教育の分野で、これら英語の多様性はどのように扱われているのであろうか。文部省が平成11年12月に出した高等学校学習指導要領では「言語材料は、原則として現代の標準的な英語によること。ただし、様々な英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態にも配慮すること」(27) となっている。さらに現代の標準的な英語は「現在国際的に広く日常的なコミュニケーションの手段として通用している英語を意味しており、

特定の地域や集団においてしか通用しない方言などに偏らない英語のことである」(28)と定義している。しかし、実際の教育現場において、日本の英語教師はこうした英語の多様性に必ずしも寛容でないようだ。McConnell (2000) は世界各国から日本にやって来て公立学校で英語を教える ALT (Assistant Language Teachers) が、アメリカ英語だけを使って教えるよう要求されたり、アフリカ系アメリカ人の ALT が、標準英語を話せるかどうか質問を受けたりする様子を報告している。

英語の種類に加えて、人種も英語使用者がネイティブスピーカーであるかどうかの判断材料になることが議論されてきている。Kachru & Nelson (1996: 80) は、我々が英語のネイティブスピーカーと言うと、アングロサクソンを思い浮かべてしまいがちであることに触れている。また、Liu (1999: 97) は、アメリカの ESL の英語学習者が、北欧出身で、幼少の頃アメリカに移住してきた白人の英語教師をネイティブスピーカーと考えているのに対し、アジア系の英語教師については、先の白人の教師よりも早くからアメリカで生活しているにもかかわらず、非ネイティブスピーカーであると考えられる傾向があることを報告している。日本の英語教育のコンテキストにおいても、この英語のネイティブスピーカーに関連した人種的偏見は、これまでも議論されて来た。津田 (1990: 140) は、英会話に熱中する日本人の英語学習者は、ある種の病的な英語中毒に陥っているとし、これらの症状の根底には白人へのあこがれがあるのだと指摘する。また、ラミス (1975) は日本の営利を目的とした英会話学校では、ネイティブスピーカーの教員を抱えることが自慢であり、広告にも彼らを起用するが、このネイティブスピーカーというのは結局のところ白人を意味するのだと述べている。また、これらの機関で有色人種が雇用を拒否されたり、白人に比べて低賃金である事実にも触れている。

私は、英語を専攻する大学生と毎日接触する中で、これら言語学や、言語教育の分野で繰り広げられて来たネイティブスピーカーについての議論と、大学生のネイティブスピーカーへの認識に少なからず隔たりがあるように感じて来た。また、これらの議論に目を向ける機会もなく、無批判にこの用語が使われているようにも感じて来た。そのような中で、これらの大学生がネイティブスピーカーにいたずらに神格化された権威を与え、一向にそれに近づくことができな自分自身の能力に焦燥感を表す様子も見えてきた。そこで、大学生の考えるネイティブスピーカーと彼らの学習のモデル像の分析を通して、そこに横たわる問題点について議論したいと思う。

調査方法

今回の調査に参加したのは260名の日本の大学生である。これらの大学生は英米語を専攻しており、いわゆるネイティブスピーカーの教師による英語の授業を受講している。また、キャ

ンパスでは世界各国からの留学生が学んでおり、この調査に参加した学生が、英語のネイティブスピーカーとみなしている人数もかなり含まれている。このような環境の中で、これらの大学生は日常的にネイティブスピーカーという用語に触れており、それぞれにこの用語に対するなんらかのイメージを抱いていると考えられる。

調査はまず「英語のネイティブスピーカーについて自由に定義しなさい」ということで、考えていることを思いつくまま自由に記述させた。これら大学生（以後、回答者と表す）は、この質問を提示されて初めてこの用語の意味に考えを巡らせた様子で、回答中も多くが定義することの難しさを訴えた。しかし、ほとんどの回答者が、その時点での自分が考える限りの定義を書き表し、大学生の英語のネイティブスピーカーに対する意識について貴重な質的データを得ることができた。

次に、これらの記述をもとに学生の中にあるネイティブスピーカーに対する共通点、相違点に関してどのようなパターンがあるかを探し、言語学、言語教育の分野での議論を考えあわせた上で8項目からなる調査用紙（付録参照）を作成した。これらの項目について、先の260名の学生に対して、再びネイティブスピーカーに対する定義（表の中で定義と表す）と、自分自身の英語学習のモデル像（表の中でモデルと表す）についての考えを聞き、集まったデータを統計処理した²⁾。

これら、回答者から集めた質的、量的なデータをもとに、今の大学生が英語のネイティブスピーカーという用語をどのように定義しているか。また、英語学習のモデルとネイティブスピーカーとの間にどのような関係があるかを分析した。

調査結果

英語が使われる環境に触れ学びはじめる時期

調査結果の中で最も顕著であったのは、生まれた時から英語に触れていることが、英語のネイティブスピーカーであるための最も重要な条件として考えられていることである。最初に行った自由記述でのネイティブスピーカーの定義においても「生まれた時から英語を使っている人」という答えは圧倒的多数を占めていた。量的データにおいても「その人が初めて英語が使われる環境に触れ学びはじめる時期」について、実に83.7%の回答者が「生まれた時から」としている（表1参照）。

	生まれた時から	小学校入学時	中学校入学時	大学入学時
定義 実数 (%)	216 (83.7)	37 (14.3)	5 (1.9)	0 (0.0)
モデル実数 (%)	198 (76.7)	42 (16.3)	16 (6.2)	2 (0.8)

表1 その人が初めて英語が使われる環境に触れ学びはじめる時期

上で述べたように、この生まれた時からその言語に触れているという条件は様々な辞書が定義するところでもあり、多くの研究者が条件としてあげているものである。回答者の記述によるデータから、生まれた時から英語に触れていることを条件としてあげている理由は、言語に触れはじめる年令と、その熟達の度合いに強い相関関係があるという推測からきていることがうかがえる。ある回答者は、「生まれた時から英語を話してないとネイティブ並みの能力はつかない」と述べている。従って、学習のモデルとなる英語としても、この生まれた時から英語に触れていることを条件としてあげる割合は大きい (76.7%)。ある回答者は「やはり生まれた時から英語を使っている人の英語が (モデルとして) よい。なぜなら私はできるだけなまりのない英語を話したいと思うからである」と答えており、自分自身や他の学生の学習経験を観察する中で、早期に目標言語に触れることが、ネイティブスピーカーと呼ばれるにふさわしい能力を身につける鍵となると信じるに至った事が伺える。ただ、小学生 (14.3%)、中学生 (1.9%) の頃から英語に触れ始めてもネイティブスピーカーと見なすことができると考える回答者もわずかながら存在する。これは、ネイティブスピーカーの能力を身につけるのに、学習開始年令は関係ないと信じる回答者がいるからだ考えられる。中学生の頃より外国語として英語を学習し始めたというある回答者は「今からでも何年か英語圏に留学すればネイティブのようになれるはずだと思う」と述べている。

英語獲得の環境

自由記述の中で、年令に続いて目立った解答は「毎日英語を話す、つまり日常会話で英語を話す人」と「教育を英語で受けている」というものである。そこで、英語の獲得の環境として、家庭での日常生活を通して自然に言語を獲得していく状況と、学校教育を通して正式に学ぶ状況に分け、それぞれがネイティブスピーカーと呼ばれるための条件として重要かどうかを質問した。その結果、回答者はこの言語獲得の環境を学習開始時期に次いで重要な条件と考えている事がわかった (表2、3参照)。また、家庭での獲得と教育を通じての獲得についての回答者の回答パターンに強い相関関係があることがわかった ($r = 0.43, p < .001$)。つまり、家庭での獲得を重要と考える回答者は教育を通じての獲得も重要だと考え、どちらか一方だけを重要と考えたり、どちらも重要でないとはしない傾向が見られる。これは回答者の多くが、家庭

と学校での言語が異なる環境で過ごしたという実体験がなく、そういった状況を想像しにくかったことが影響していると考えられる。

	絶対必要	重要	望ましい	関係ない
定義 実数 (%)	112 (43.1)	73 (28.1)	60 (23.1)	15 (5.8)
モデル実数 (%)	84 (32.3)	77 (29.6)	69 (26.5)	30 (11.5)

表2 家庭で使われる言語が英語である環境で育った人

	絶対必要	重要	望ましい	関係ない
定義 実数 (%)	91 (35.0)	103 (39.6)	36 (13.8)	30 (11.5)
モデル実数 (%)	108 (41.5)	80 (30.8)	47 (18.1)	25 (9.6)

表3 英語で教育を受けた人である

家庭で自然に英語に触れる環境にあることがネイティブスピーカーと見なされるために絶対に必要な条件であるとする回答者が全体の43.1%、重要な条件であるを合わせると71.2%にのぼり、重要視されていることがわかる。教育というフォーマルな英語習得をネイティブスピーカーの条件にするか否かについては、絶対必要と重要であるを合わせて74.6%にのぼり、やはり重要な条件と考えられていることがわかる。ただ、学習のモデルとなると、学校教育を英語で受けていることがより重要だと考えられている。

しかし、ネイティブスピーカーの条件として、これら学習環境について約4分の1に及ぶ回答者がこれらの条件を望ましい、または関係ないとし、あまり重要ではないと考えていることも見逃せない。この理由について、これら回答者の何人かにインタビューを試みると、家庭では日本語を使っているのに、インターナショナルスクールで勉強したので、英語も日本語もネイティブのようになった友だちがいる例や、両親共に日本人であるが幼少の頃アメリカで過ごしたためにネイティブの英語能力を身に付けたある有名歌手の例などが語られた。もちろん、ここで回答者が引き合いに出してネイティブの能力を持つとする人々が、実際のところどの程度の言語能力を持っているのかは定かではない。ただ回答者が、とにかく生活のある一つのドメインで英語を継続的に使うことをネイティブスピーカーの条件と考えているが、生活のすべてにおいて英語を使うことは、それほど重要視していないと言えるのではない。

また、これらの答えから各ドメインで違う言語を継続的に使用した場合、二言語以上のネイティブスピーカーになることも可能であると考えているとも言える。量的データによると、英語だけのモノリンガルであることを英語のネイティブスピーカーの絶対条件とするのは約1割

(10.4%)にとどまっている(表4参照)。また、この問題について、ネイティブスピーカーの定義には関係ないとする回答者は57.7%にのぼっている。さらに、モデルとなるスピーカーということになると、モノリンガルであることを条件とする回答者はさらに少なくなる(4.2%)。これは、回答者の多くがバイリンガルになることを目標に英語の学習を続けている現実と関係があると考えられる。

	英語だけ	英語の方が得意	バイリンガル	関係ない
定義 実数 (%)	27 (10.4)	68 (26.2)	15 (5.8)	150 (57.5)
モデル実数 (%)	11 (4.2)	71 (27.3)	53 (20.4)	125 (48.1)

表4 その人の英語以外の能力

これら回答者のバイリンガルのネイティブ言語に対する考え方は、この分野の様々な研究報告とは随分異なる。例えば、Liu (1999)の研究の参加者のコメントにもみられるように、英語だけのモノリンガルの場合、自身をネイティブスピーカーと見なすことになんら問題を感じないようであるが、二言語以上の使用者は、どの言語のネイティブスピーカーと考えるかについては複雑である。Kachru (1996: 81)は、多言語社会での英語使用を考える時、どれだけのドメインで英語が使われているかという範囲 (range) と、社会の中でどの程度まで英語の使用が浸透しているかと言う深度 (depth) を考慮することが重要であると述べている。しかし、今回の調査の回答者のほとんどが、このような多言語社会での生活経験が無いため、ネイティブスピーカーを定義するにあたって、このような言語使用の範囲や深度に関して意識する機会があまりなかったのではないかと考えられる。また今回の回答者は、言語運用を実用的観点からのみ見る傾向が強く、ネイティブスピーカーと自覚するのに及ぼすアイデンティティの影響にまで思いを巡らせる経験がないことが原因ではないか。

英語の種類

先に述べたように、どの種類の英語を使っているかについても、その使い手を英語のネイティブスピーカーと見なすかどうか大きな影響を与える。まず量的データの示す大きな特徴の一つは、育った場所が、その人が使う英語の種類に大きな影響を与えるという前提が回答者の中にみられることである。育った場所と英語の種類の問題には、ネイティブスピーカーの定義 ($r = 0.60, p < .001$)にも、学習のモデル ($r = 0.59, p < .001$)にも強い相関関係がみられる。日本の大学生が、これら育った場所、英語の種類をネイティブスピーカーと判断する材料として、どのように見ているかは興味深い。しかし、彼らがこれまでに世界中で使われるおびただしい種類の英語に数多く触れてきて、それぞれに彼らなりの判断基準を形成しているとは考え

にくい。そこで、Kachru & Nelson (1996) の英語使用者の三つのサークルを使い、それぞれの種類の使い手を彼らがネイティブスピーカーと見なすかどうか尋ね結果を得た (表5、6 参照)。

	英国・米国の英語	Inner Circle	Inner + Outer Circle	関係ない
定義 実数 (%)	7 (2.7)	63 (24.2)	107 (41.2)	83 (31.9)
モデル実数 (%)	39 (15.0)	90 (34.6)	37 (14.2)	94 (36.2)

表5 その人が育った場所

	英国・米国の英語	Inner Circle	Inner + Outer Circle	関係ない
定義 実数 (%)	19 (7.3)	74 (28.6)	96 (37.1)	70 (27.0)
モデル実数 (%)	78 (30.0)	104 (40.0)	31 (11.9)	47 (18.1)

表6 その人が話す英語の種類

まず大きな特徴としては、使用される英語の種類に基づいてネイティブスピーカーを定義するのに、Outer Circle までを含めている回答者がかなりにのぼることである (37.1%)。Inner Circle に限定している回答者 (35.9%) とほぼ同じ割合である。また、アメリカとイギリスの英語に限定するという回答者は僅か7.3%にとどまっている。この結果も先に述べた、日本の大学生は、ある1つのドメインでも日常的に英語が使われていればネイティブスピーカーと考える傾向があることを裏付けていると考えられる。これは、英語の使用が授業内のみに限られがちな回答者との対比によるのかもしれない。そして、限られたドメインにおいても自由に言語運用ができればネイティブスピーカーと見なしているといえる。

ただ、学習の目標となると話しは別で、イギリス、アメリカの英語に限る回答者は30%と増加し、Inner Circle 全般の英語を含めると70%にのぼる。したがって、回答者は Outer Circle の英語の使用者をネイティブスピーカーと考えながらも、学習の目標としては Inner Circle の英語が適切であると考えているようである。外国語のなまりに関する質問にもこの点は表れており、ネイティブスピーカーを定義するのに外国語のなまりがある話し手は比較的寛容に見られているのに対し ($m = 2.58$)、学習の目標としては、なまりのないことが条件とされる傾向がやや強い ($m = 2.16$) (表7 参照)。

	絶対必要	重要	望ましい	関係ない
定義 実数 (%)	49 (18.9)	82 (31.7)	56 (21.6)	72 (27.8)
モデル実数 (%)	85 (32.7)	78 (30.0)	68 (26.2)	29 (11.2)

表7 英語で話した時に外国語のなまりがない人

回答者は Outer Circle の英語使用者を含めてネイティブスピーカーと見なす傾向があるにもかかわらず、学習もモデルとしてはなぜ、Inner Circle にこだわるのであろうか。この問題について量的データには表れない回答者の考えを知るために、自由記述のデータを検証した。まず、代表的な回答として「日本の学校では、ほとんどがアメリカの英語を使っていると思うので、私はアメリカの英語が、学習のモデルとして最適ではないかと思う」というものである。彼らはこれまでの英語の学習経験を通して、時にはっきりと、またそれとなくアメリカ英語を学んでいるのだと告げられて来たようである。また、アメリカ英語の規範が彼らの英語を評価する基準として使われていると感じているので、当然アメリカ英語を学習目標とするべきであると考えているようである。したがって、日本の英語教育の日々の活動を通して、文部省の言う「現代の標準的な英語」とはアメリカ英語を指しているという印象を学習者に与えているようである。

また、彼らのアメリカ英語を学んでいるという意識は、アメリカ英語とかけ離れた英語は理解しづらいという印象も生み出しているようだ。ある回答者は「普段、私が学んでいる英語がアメリカ英語ということもあり、自分の上達の上でも聞き慣れない英語を話す人から教わるより、聞き慣れたアメリカ英語を使う人がいい」というように答えている。彼らは英語学習において、聞き慣れていなくわかりづらいものは排除したいと感じているようである。

また、それぞれの英語の種類、明瞭さ、理解の可能性に疑問を投げかける声も聞かれる。ある回答者は自分自身の観察に基づいてはいないものの「オーストラリアやニュージーランドの英語は癖があると聞いたので見本にはしたくない」と答えている。また、実際に Outer Circle の英語を聞いた経験がある回答者は「インド英語を聞いたことがあるが、その発音から全く理解できなかった。どうせ習得するなら多くの人にわかってもらえるような発音で話したい」と答えている。こういった英語の変種、特に Outer Circle の英語の明瞭度についてはこれまでも研究がされてきている。Kachru & Nelson (1996: 94-95) はこれらまでの研究を引用しながら Inner Circle の英語は被験者にとって逆に一番わかりにくいものであったと述べている。そして、英語教育の世界においてネイティブスピーカーの英語こそが一番であるという自明の真理があるような思い込みがあり、それゆえにこれらの英語が一番世界で広く使われてしかるべきであり、これが理解できないというのは、その人の英語が未熟だからと考える図式ができあ

がっているのではないかと述べている。

今回の調査の回答者の中にも、学習のモデルとしての Inner Circle の英語志向は明らかに存在するようである。しかし、Outer Circle, Expanding Circle の英語までも学習のモデルと考える回答者も 3 割存在することも見逃せない。ある回答者は「私がモデルとしている人は別にネイティブでなくてもいいということ。つまり、英語を正しく話せるならば、外国の人でも良いということである」と述べており、何が何でも Inner Circle の英語をモデルとするということではないことをうかがわせる。また、当面は Inner Circle の英語をモデルとしながらも、将来的には様々な種類の英語を学びたいとする考えもある。ある回答者は「大体一般的な標準英語を勉強して、ある程度身につけてきたら、次ぎのモデルとしては、方言などもありえる」と述べている。

人種

これまでにも、英語のネイティブスピーカーの判断材料として人種が大きな要因となっていることが指摘されてきている。また上でも述べたように、日本では特に、英語学習において白人優位の構図があることも指摘されている。しかし、今回の回答者に自由記述してもらった所、英語のネイティブスピーカーを定義するにあたって、人種に関する記述はほとんど見られなかった。ただ、学習のモデルとしては非常に僅かではあるが人種に関する言及が見られた。例えば、1 人の回答者は「私のモデルは白人で男前でなくてはならない」と書いている。そこで、調査用紙の中にこの人種に関する質問を加え量的データを得た（表 8 参照）。

	白人	白人か黒人	日本人以外	関係ない
定義 実数 (%)	3 (1.2)	10 (3.8)	5 (1.9)	242 (93.1)
モデル実数 (%)	9 (3.5)	18 (6.9)	8 (3.1)	224 (86.5)

表 8 その人の人種

結果としては、93.1%に及ぶ回答者が人種は英語のネイティブスピーカーを定義するのに関係ないとしており、学習のモデルとしても 86.5%が人種は関係ないと考えている。それでもあえて学習のモデルとして白人の英語に限定するとしたある回答者は「黒人英語は避けたい。それは差別的な意味からではなく、自分が習得するのであれば、できるだけなまりの少ない英語が望ましいという気持ちがあるからだ」と述べており、英語を専攻する大学生の中に、黒人英語はなまりが強く非標準的という意識があるようだ。また、極少数ではあるが、こういった黒人の英語を学習のモデルとしたいとする学生も存在する。ある回答者は、黒人英語を学びたい動機として「Hip Hop 系の言葉や F-Word を自由に使いこなせるようになりたい」と答えてお

り、言語に対する人種的偏見やステレオタイプは日本人大学生の間にも存在するようである。

まとめ

これまでの結果を総合してみると、日本の大学生の英語のネイティブスピーカー像が浮かび上がってくる。多数派の意見を総合してみると、彼らのイメージする英語のネイティブスピーカーの条件とは、生まれた時から英語に触れる環境にあった人であり、使う英語の種類、人種は重要な要素ではないが、日常のあるドメインにおいて継続的に英語を使用している人ということになる。ただ、学習のモデルとなる英語の使用者は彼らのイメージするネイティブスピーカー像とだいたい重なる。ただ、英語で教育を受けたことと、Inner Circle の英語の使用者であることが重要視される傾向がある。

まず英語のネイティブスピーカーは、生まれた時から英語に触れていなければならないという考えは、ネイティブ並みの英語力をつけるためには、生後なるべく早い時期に英語に触れ学習を始める事が不可欠であるという考えに結びついているようである。そして、これは回答者が大学生である自分は、これからいくら努力をしたところで英語上達の道は非常に限られたものではないかという焦燥感にもつながっているようである。現在の日本の大学生にとって、生後すぐに日常的に英語に触れるような環境にあることは非常に稀である。中学校で教科の一つとして英語が導入され学習を開始するケースがほとんどである。今回の調査に参加した何人かの回答者もこのような自分の英語学習の履歴に強い後悔の念を表している。ある回答者は「ネイティブのようになるためには絶対生まれた時から英語を習わないといけない。私はもう無理なので子どもが生まれたらなるべく早く英語を聞かせたり習わせたりしたい」と書いている。当然、この回答者にとってネイティブのように英語を使えるようになることは究極の目標なのであろう。ただ、まだ大学生という若さで英語学習に絶望感を持ち、目標を失い、挙げ句の果てにまだ生まれぬ子供にその夢を托さなければいけないという現実、応用言語学、第2言語習得研究、英語教育などの分野でいたずらに神格化されてきたネイティブスピーカーという用語の使われ方、そしてその実体を明らかにしないまま、目標言語としてネイティブスピーカーの言語使用を前提としてきたことに問題があるのではないだろうか。

そこで、英語のネイティブスピーカーの実体を明らかにしようとした時に避けて通れないのが、今日これほど多様化した英語の変種をどのように扱うかという問題である。今回の調査の量的データから、回答者はネイティブスピーカーを定義するにあたり、これら英語の変種の問題をあまり重用視していないといえる。これは、これら回答者が多様な英語の変種のそれぞれに理解を示し英語のネイティブスピーカーとしての資格を与えた結果だとも考えられる。しかし、逆にこの結果の意味するところは、文部省が学習指導要領の中で適切な言語材料として示

す「現代の標準的な英語」が教育現場においてすなわち Inner Circle の英語、中でも主にアメリカ英語と考えられてきた結果、回答者が世界中で英語が土着化し多様な変種を生み出している事実について理解を深める機会がなかったことによるのではないとも考えられる。このことは、先に述べたように英語に加えて他の言語が使用できるバイリンガルの人々が自分をネイティブスピーカーだと考えるのに困難を感じるという報告があるにもかかわらず、今回の調査において、回答者がバイリンガルであることがネイティブスピーカーを定義する上で重要とされていないことからわかる。その結果、とりあえず日常どこかの場面で英語を継続的に使っているのであればネイティブスピーカーと見なしてよいのではないかという判断に至ったのではないだろうか。そしてこれは、Outer Circle の英語の使用をネイティブスピーカーと考える平等主義的立場をとりながらも、学習のモデルとしては学校教育で慣れ親しんだ Inner Circle の英語が適切であるという今回の調査結果につながっていると言えないだろうか。このことは、英語に外国語のなまりがあってもネイティブスピーカーと見なすが、学習のモデルとしては相応しくないという表7の結果にも表れている。

英語教育においてネイティブスピーカーの言語使用は常に学習のモデルとされてきた。これは、Hymes (1972a, 1972b) の提唱したコミュニケーション能力と呼ばれる概念が英語教育に応用されるに至って (Canale & Swain 1980, Canale 1983) 学習者は言語使用に関わる社会的な行動スタイルまでもネイティブスピーカー (多くの場合アメリカ人) を観察し、そっくりまねることを要求されて来た。しかし、このような実践の中で次第に、その妥当性に疑問の声があるようになった (例、Fairclough 1989, Kramsch 1993)。日本では、鈴木 (1999) がその著書の中で、日本人は日本人の癖 (和臭) が出てしまうのを恐れることなく、日本人の特徴が表れた英語を堂々と使用すべきであると説いている。そして、ある特定の民族の英語使用に根ざさない「国際英語」の使用を奨励している。しかし、私は英語を専攻する大学生との日々の接触の中で、このどちらの立場にも違和感を覚えている。今から30年も前に Gardner と Lambert (1972) が指摘したように、学習者によって特定の地域の人々や文化を始めとする全てに魅力を感じる事が、その言語を学習する動機につながる場合や (integrative motivation)、それとは関係なく、とにかく必要に迫られ、コミュニケーションの、または立身出世などの道具として言語を学習しようという動機が生まれる (instrumental motivation) 場合など、その学習の動機は人それぞれである。今回の調査の回答者の中にも、特に英語圏の国々に興味があるわけではないが、将来就職に有利かもしれないとして、資格試験などのために英語を学習している者もいれば、英語圏でのホームステイ体験などから、そこの文化に憧れ、できることならその国の一員になり一生を過ごしたいと考える者もいる。また先に触れたように、黒人の文化に魅せられて英語の中でも非標準とされるものへの同化をあえて望む学習者もいる。これら多様な動機を持った学習者を前に、例えばアメリカ人のように英語を使えない学生に、いか

にもアメリカ人らしく見えるような言語使用を強要したり、逆にアメリカ人のようになると必死の努力を続ける学生を、「英会話症候群」(津田 1990) と呼び、病気扱いしてその態度をたしなめる権利が、英語教師に果たしてあるのだろうかと思う。また、これら学生の英語学習に対する動機は、一生を通じて同じというわけでもなく、その発達段階の途上で変化していくものでもある (Kubota 1998)。こう言った多様な学習者を前に、目標言語はアメリカ英語がふさわしいか、いやイギリス英語だ、それとも国際英語だと議論して決定するのは英語教師ではなく、学習者が自分自身の目的に合わせて選択すべきことではないだろうか。英語教師はこれら学習者の選択に必要な情報、すなわち今日の多様な英語、英語の使用者について知り、考える機会を与えることではないだろうか。ただ、これはなにも世界中の様々な変種を実際に使えるような訓練をすることではない。彼らが今漠然とネイティブのように話せるようになりたいと考えている英語学習の目標を、より現実的で具体的な方向付けをするための意識を高めるための手段である。

日本人の英語観は日々刻々と変化しているようである。ラミス (1975) や津田 (1990) が指摘する日本人の英語に関する白人一辺倒の人種的偏見は、今回の表 8 の調査結果を見る限り今は昔のものとなりつつあるようである。数十年前とは比較にならないくらい増加した、多様な英語の使用者との接触の中で、現在の大学生の英語のネイティブスピーカー、そして英語学習の最終目標は常に変化しているのである。そのような状況でこそ、これらの問題への意識を高めることが重要ではないだろうか。

参考文献

- Buck, K. (Ed.) (1989). *The ACTFL Oral Proficiency Interview: Tester Training Manual*. New York: The American Council on the Teaching of Foreign Languages.
- Canale, M. (1983). From communicative competence to communicative language pedagogy. In J. Richards and R. Schmidt (Eds.), *Language and Communication* (pp. 2-27). London: Longman.
- Canale, M. and Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, 1, 1-47.
- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Davies, A. (1991). *The Native Speaker in Applied Linguistics*. Edinburgh, Scotland: Edinburgh University Press.
- Fairclough, N. (1989). *Language and Power*. London and New York, Longman.
- Gass, S. M. and Selinker, L. (1994). *Second Language Acquisition: An Introductory Course*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

- Hymes, D. (1972a). Models of interaction of language and social life. In J. J. Gumperz and D. Hymes (Eds.), *Directions in Sociolinguistics: Ethnography of Communication* (pp. 35-71). New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Hymes, D. (1972b). On communicative competence. In J. B. Pride and J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics* (pp. 269-293). Harmondsworth: Penguin.
- Kachru, B.J. & Nelson C. L. (1996). World Englishes. In S. L. McKay and N. H. Hornberger (Eds.), *Sociolinguistics and Language Teaching*: (pp. 71-102). New York: Cambridge University Press.
- Kramersch, C. (1993). *Context and Culture in Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Kubota, M. (1997). Appropriacy Planning: Speech acts studies and planning appropriate models for ESL learners. *Penn Working Paper in Educational Linguistics* 12 (2), 53-70.
- Kubota, M. (1998). *Choices of Performed Identities: Negotiating, Constructing and Displaying Appropriateness in an Adult ESL Classroom for Teaching and Learning Communicative Competence*. Unpublished Ph.D. Dissertation. Philadelphia: University of Pennsylvania.
- Liu, J. (1999). Non-native-English-professionals in TESOL. *TESOL Quarterly*, 33 (1), 85-102.
- ラミス・ダグラス (1975). 「イデオロギーとしての英会話」東京：昭文社.
- McConnell, D. L. (2000). *Importing Diversity: Inside Japan's JET Program*, Berkley, CA: University of California Press.
- 文部省 (1999). 「高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編」東京：開隆堂出版.
- バイクデー, T. M. (1985). 「ネイティブスピーカーとは誰のこと？」松本安弘／松本アイリン訳. 東京：丸善. (Paikeday, T. M. (1985). *The Native speaker is Dead!*, Toronto, Ontario: Paikeday.)
- Pennycook, A. (1994). *The cultural politics of English as an international language*. London: Longman.
- Pennycook, A. (2001). *Critical Applied Linguistics: A critical introduction*. NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publishers
- Phillipson, R. (1992). *Linguistic Imperialism*. Oxford: Oxford University Press.
- Rampton, MBH, (1990). Displacing the "native speaker": expertise, affiliation and inheritance. *ELT Journal* 44 (2): 97-101.
- 鈴木孝夫 (1999). 「日本人はなぜ英語ができないか」東京：岩波書店.
- 津田幸男 (1990). 「英語支配の構造」東京：第三書房.
- Widdowson, H. G. (1996). The ownership of English. *TESOL Quarterly*, 28, 377-381.

付録

(調査用紙)

前回の英語のネイティブスピーカーについて自由に定義して下さいという調査から、それぞれの人が英語のネイティブスピーカーについて様々な考えを持っていることがわかりました。そこで今回はその結果

ネイティブスピーカー

をもとに少し絞った調査をしたいと思います。どの質問も正答、誤答はありませんので、自分の考えることを答えて下さい。選択肢 a) - d) のひとつだけをまるで囲んで下さい。

また、裏面はあなたの英語の学習のモデルになるスピーカーについて同じ質問をします。それぞれあなたが英語を勉強するにあたって、こんな人のように話せるようになりたいという人物像について答えてください。

下のそれぞれの質問に答えるにあたって、質問に登場する人は22歳の大学を卒業し英語圏で不自由なくコミュニケーションがとれる人を想像して下さい。

(1) 英語で教育を受けた人である

英語のネイティブスピーカーとみなされるためには

- a) 絶対必要な条件である
- b) 重要であるが絶対必要な条件ではない
- c) 望ましい条件である
- d) 関係ない

(2) 家庭で使われる言語が英語である環境で育った人

英語のネイティブスピーカーとみなされるためには

- a) 絶対必要な条件である
- b) 重要であるが絶対必要な条件ではない
- c) 望ましい条件である
- d) 関係ない

(3) 英語で話した時に外国語のなまりがない人

英語のネイティブスピーカーとみなされるためには

- a) 絶対必要な条件である
- b) 重要であるが絶対必要な条件ではない
- c) 望ましい条件である
- d) 関係ない

(4) その人が育った場所

英語のネイティブスピーカーとみなされるためには

- a) アメリカかイギリスでなければならない
- b) アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドのいずれかでなければならない
- c) アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、インド、パキスタン、シンガポール、南アフリカなど英語が教育、政治などで重要なはたらきをしている国でなければならない
- d) 関係ない

(5) その人が話す英語の種類

英語のネイティブスピーカーとみなされるためには

- a) アメリカかイギリスで使われている英語の種類でなければいけない
- b) アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドのいずれかで使われている英語の種類でなければいけない
- c) アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、インド、パキスタン、シンガポール、南アフリカなど英語が教育、政治などで重要なはたらきをしている国で使われている英語の種類でなければいけない
- d) 関係ない

(6) その人の人種

英語のネイティブスピーカーとみなされるためには

- a) 白人でなければならない
- b) 白人か黒人でなければならない
- c) 白人、黒人、または日本人以外でなければならない
- d) 関係ない

(7) その人が初めて英語が使われる環境に触れ学び始める時期

英語のネイティブスピーカーとみなされるためには

- a) 生まれた時から
- b) 小学校入学時
- c) 中学校入学時
- d) 大学入学時

(8) その人の英語以外の能力

英語のネイティブスピーカーとみなされるためには

- a) 英語だけのスピーカーでなければならない
- b) 英語だけのスピーカー、または英語の方が得意なバイリンガルでなければならない
- c) 英語だけのスピーカー、またはバイリンガルで英語ともう一方の言語の能力が同じでなければいけない
- d) 関係ない

注

1) この学習指導要領が出された当時の名称であり、現在の文部科学省。

2) データの中で、回答者の総数が260名にならないものは、無回答があったためである。

(くぼた・みつお 外国語学部助教授)